

松 山 大 学 論 集  
第 32 卷 第 4 号 抜 刷  
2 0 2 0 年 10 月 発 行

## 評伝 入江奨先生の人と学問（その3）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 靖 弘

# 評伝 入江奨先生の人と学問（その3）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 埤 弘

## 目 次

はじめに

第一章 生誕から松山商科大学就任まで

（1923年6月～1951年3月）

第二章 松山商科大学教員時代

第1節 松山商科大学一教員時代

（1951年3月～1973年3月）

1) 1951（昭和26）年度

）

3) 1953（昭和28）年度 （以上、第32巻第2号）

4) 1954（昭和29）年度

）

13) 1963（昭和38）年度 （以上、第32巻第3号）

14) 1964（昭和39）年度

15) 1965（昭和40）年度

16) 1966（昭和41）年度

17) 1967（昭和42）年度

18) 1968（昭和43）年度

19) 1969（昭和44）年度

20) 1970（昭和45）年度

21) 1971（昭和46）年度

22) 1972（昭和47）年度 （以上、本号）

第2節 経済学部部長・大学院経済学研究科長時代

（1973年4月～1984年3月）

第3節 再び教授に戻って（1984年4月～1989年3月）

第4節 再雇用期の入江先生（1989年4月～1994年3月）

第三章 退職後の入江先生（1994年4月～2005年4月）  
おわりに

#### 14) 1964（昭和39）年度

入江先生赴任14年目である。40歳から41歳にかけての時期である。

学長は増岡喜義である（1年目）。経済学部長には新しく上田藤十郎が就任した<sup>1)</sup>

4月10日午前10時より本学講堂にて入学式が行なわれ、経済学部に333名が入学した。増岡学長が本学の沿革、概略を述べ、新入生に対し、これからの大学生活における学問、思想、行動にわたる注意を述べた。注意とは、星野前学長と同様に、学生としての本分を守って、政治運動よりも学問にエネルギーを、というものであった<sup>2)</sup>

本年度、経済学部は新教員として経済研究所研究員の伊達勇〔功〕が講師として、宮崎満が助手として採用された<sup>3)</sup>

本年度の入江先生の授業科目は、前年と同様で、一般教育科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。

一般教育科目の経済学の教授要目は、前年とほぼ同様であり、教科書として講義案（プリント）を使用した。なお、参考書として、篠原三代平編著『近代経済学講座』（全4巻）有斐閣、ソ・アカデミー経済研究所『経済学教科書』（全4巻）新日本出版社、A・スミス『国富論』（全5冊）岩波文庫、レーニン『帝国主義論』国民文庫、マルクス『資本論』（全13冊）青木文庫、を挙げていた。

専門科目の経済学史の教授要目は、前年度より簡明化し、第1編 経済学の生成過程、第2編 古典学派の形成・発展、第3編 古典学派の解体過程、第4編 近代経済学の形成と展開、第5編 現代経済学の形成、となっている。

1) 『六十年史（資料編）』126～131頁。

2) 『松山商大新聞』第125号、1964年5月4日。『六十年史（資料編）』173頁。

3) 『松山商大新聞』第126号、1964年5月25日。

講義案（プリント）はない。参考書として、マルクス『剰余価値学説史』、シュムペーター『経済分析の歴史』、堀経夫『経済学史通論』、白杉庄一郎『経済学史概説』、出口勇蔵『経済学史』を挙げている<sup>4)</sup>

本年のゼミ1には、江藤、大山、兼久、仙波、高須賀、中臣、中山、大塚潮治（経済研究部、ゼミ連、学友会）らが入った。そして、ゼミ1のテキストは、ハロッドの『景気循環論』であった<sup>5)</sup>

ゼミ2（4年、山口卓志、九門一明らの学年）のテキストはハロッドの『動態経済学序説』であった<sup>6)</sup>。なお、九門一明の記憶によると、ハロッドの『経済成長論』とケインズの『一般理論』であったという<sup>7)</sup>

また、入江先生は引き続き、資本論研究会を指導している。なお新聞学会顧問は広田喜作に交代した（1964年4月～1966年3月）。

本年度からゼミナール連合協議会の会長（部長）は井出正に代わり、入江先生が新たに部長に就任した（後、部長から顧問になる、以下顧問とする）<sup>8)</sup>。以後、1990年度（又は1991年度）まで一貫してゼミ連を指導した（学生課作成資料より）。入江先生がいかに学生の自主的研究活動に熱心であったかがわらう。ゼミ1の大塚潮治もゼミ連で活動した。

5月、入江先生は、経済学史学会関西西部会において「経済学『革新』期における連続的要因と非連続的要因－W・Sジェボンズについて－」を報告した。それは「経済学『革新』期における諸理論の展開状況をとらえるために『二大潮流』の形成点にメスを加えようとする報告。ジェボンズの『批判的作業』の発起因が古典派体系に内包されていること、その作業が経済学の精密科学化の方向での作業であること、その結果として、『革新』性が維持しがたいことを

---

4) 『1964年教授要目』より。

5) 『1964年教授要目』。大塚潮治「入江先生とともに」『つくし』第25号、2000年7月、26～27頁。

6) 『1964年教授要目』。

7) 入江奨「山口卓志君の学部学生時代」『松山大学論集』第39巻第2号（山口卓志教授追悼記念号）、1988年6月。

8) 入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』248頁。

論点としている」というものであった<sup>9)</sup>

8月、待望の研究センターの着工が始まった。学園長期計画の一環である研究センターは現在の各教授の研究室、経済研究所、中小企業研究所が手狭であり不備であるため、これらすべてを含む設備の拡充した施設にしようと、現在の図書館及びテニスコートの東側の土地約2,500平方メートルに建設せんとするものである<sup>10)</sup>

11月、入江先生は、経済学史の教科書として『経済学史講義』第2巻を松山商大の生協から出版している。その内容について、入江先生は次のように記している。「リカードウとの関連でマルサスを論ずることが主眼となって準備されたもの、マルクス、ジェボンズ、メンガーにもふれている。特色はマルクス、ジェボンズ、メンガー論にある。但し、全体としてまとまっていない（一五万余字）」<sup>11)</sup>

文部省申請書に「全体としてまとまっていない」などと書くとは、いかにも生真面目な入江先生らしい。

なお、本年度、第11回全日ゼミ、第10回西日本ゼミ、第4回中四ゼミが開催されているが<sup>12)</sup> その参加状況は不明である。大塚潮治の回想によれば全部参加したと述べている（大塚潮治より聞き取り）。

そして、本年の特筆すべきことは、ゼミ連（顧問は入江奨）が主催して、12月6、7日の両日、第1回学内ゼミナール大会を開催したことである。14のゼミが参加、発表している<sup>13)</sup>

また、1965（昭和40）年1月には、太田、入江、安井の3ゼミが討論会を開いている。この3ゼミは経済学部の中でも熱心なゼミであった<sup>14)</sup>

---

9) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

10) 『松山商大新聞』第127号、1964年7月4日。

11) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

12) 入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一餉」『六十年史（写真編）』250頁。

13) 『松山商大新聞』第130号、1965年1月19日。

14) 同。

1965（昭和40）年2月、入江先生は、『松山商大論集』第15巻第6号に「マルサスの経済理論に関する覚書—とくに自然価格論との関連において—」を発表した。この論文において、入江先生は「マルサスの真実価値論」は「スミスの真実価格論」を継承するものでないこと、スミスからマルサスへの「価格体系」論に関する変化がみられることを指摘している。そして、入江先生はこの論文の概要について、後に次のように述べている。

「マルサスの価格体系を自然価格体系として、或いは自然価値体系としてとらえることができるかどうかを究明する作業をおこなっている。スミスとマルサスのちがいがどこにあるかという観点で。マルサスは、自然価格の有効性をみとめるが、それを『通常原費』と解しており、競争過程を介して究極的に自然価格の体系が成立し実現するとみる自然価格体系論を考えておらず、むしろ徹底した市場価格体系論（徹底した需要供給論）を考えているとみる見解、真実価格論をとらず真実価値論を採っているとみる見解、交換上の内在価値＝自然価値の決定の場が市場価格体系形成過程に求められているとみる見解が示されている」<sup>15)</sup>

2月21日、1965年度の入試が行なわれた。経済学部の募集定員は250名で（文部省定員は150名）、受験者は1,244名であった。そして2月27日に360名の合格発表を行なった<sup>16)</sup>

3月4日、「松山商科大学学部長選考規程」が制定施行された。それは従来のように、最終決定は教授のみ、という規程は廃止された。民主化の現われであった<sup>17)</sup>

---

15) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

16) 『松山商大新聞』第131号、1965年3月20日。なお、『六十年史（資料編）』の173頁では、経済学部の志願者は1,589名、経営学部の志願者は1,502名となっており、かなり齟齬がある。

17) 『五十年史』331～332頁。

3月、上田藤十郎経済学部長（1899年11月生まれ）が1965年3月末で65歳の定年になるので、次の学部長選挙が行なわれ、伊藤恒夫教授（53歳、哲学、倫理学、教育学）が選出された。

3月20日、第14回松山商大卒業式が行なわれ、307名が卒業した<sup>18)</sup> 商経学部最後の卒業式であった。入江ゼミでは、九門一明（経済研究部、学友会副委員長）、古賀（経済研究部、資本論研究会主将）、寺岡（経済研究部、ゼミ連）、中浜、山口卓志（新聞学会編集長）ら11名が卒業した。このうち山口卓志は入江先生のすすめで神戸大学大学院に進学する。

### 15) 1965（昭和40）年度

入江先生赴任15年目である。41歳から42歳にかけての時期である。

学長は増岡喜義が続けている（2年目）。経済学部長は新しく伊藤恒夫が就任した。

4月9日、入学式が挙行され、経済学部に333名が入学した。増岡学長は式辞の中で、学校の歴史ならびに校訓「三実主義」を説明し、有意義な学生生活を送るよう希望を述べた<sup>1)</sup>

本年度、経済学部は新任教員として、岩田裕<sup>2)</sup> が助手として、佐藤幸夫が講師（商法）として採用された<sup>3)</sup>

本年度の入江先生の授業科目は、前年と同様で、一般教育科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。

一般教育科目の経済学の教授要目は、前年に比し、さらに体系的かつ詳細に

18) 『松山商大新聞』第131号、1965年3月20日。なお、その後、再試で卒業生は増え、『六十年史（資料編）』では372名、『温山会名簿』では374名。

1) 『松山商大新聞』第132号、1965年4月30日。なお、『六十年史（資料編）』の173頁の入学者数は経済学部336名、経営学部311名で、若干齟齬がある。

2) 岩田裕は1938年11月愛媛県に生まれ、松山東高等学校を卒業し、1958年4月松山商大商経学部に入學、1962年3月卒業し、同年4月神戸大学大学院経済学研究科修士課程に入學し、1964年3月同課程を修了し、同年4月博士課程に進学していた。

3) 『松山商大新聞』第134号、1965年7月7日。

なっている。それは次の通りで、マルクス『資本論』の内容の解説が中心になってきているようである。

- 「第1部 総論－経済学の現状と経済問題のとらえ方
  - 第1章 経済学の歴史
  - 第2章 経済学の現状
  - 第3章 経済問題のとらえ方
- 第2部 商品生産社会の基本的経済法則
  - 第1章 商品生産社会の基本的特徴
  - 第2章 価格体系
  - 第3章 貨幣経済の本質的構造－価値関係－価値法則
  - 第4章 単純商品生産から資本制商品生産への転化
- 第3部 資本制再生産の基本的構造
  - 第1編 資本制再生産の構造と過程
    - 第1章 資本制社会の基本的経済法則－剰余価値生産－
    - 第2章 剰余価値増大の方法
    - 第3章 賃金
    - 第4章 資本制蓄積の一般法則
  - 第2編 資本の流通過程
    - 第1章 資本の回転，年剰余価値率
    - 第2章 流通費
  - 第3編 諸資本間の競争と連繋および資本構造の内部的変化
    - 第1章 平均利潤率，生産価格
    - 第2章 商品取扱資本－商業利潤と生産価格
    - 第3章 銀行資本と利子生み資本
    - 第4章 諸資本間の競争と土地所有
  - 第4編 国際経済



## 第4部 資本制生産の運動過程

経済成長、景気循環（恐慌）、独占資本主義、帝国主義、資本主義の全般的危機などの問題が考察される」<sup>4)</sup>

専門科目の経済学史の教授要目は前年度と同様であり、参考書もほぼ同じであった。経済学史の講義を受けた、ゼミ生の一柿卓爾は、後年、「経済学史の授業で今でもおぼえていること」として、次のようなエピソードを記している。紹介しておこう。

「経済学史の授業は多分三回生の時受講したように思う（二回生の時かもしれない）。授業は、一回生の時の経済学以上に熱心かつ丁寧に行われた。…緊張しながら受講したことを覚えている。大切なことは聞きのがしてはいけないという思いで授業に臨んでいた。ノートもしっかりとり、後で整理したほどである。ゼミや陸上競技部の連中からノートを見せてほしいとの依頼もあった。充分理解できたとは到底言えないが、スミス、リカード、マルサスの話には何か迫力があつた。研究者の気迫が感じられた。多分、専門科目の経済学史の授業の時であった。場所は三号館の大教室であった。一人の学生が授業の途中、後ろのドアを開け、無断で退出した時である。教壇で講義中であった先生が即座に『待て』と叫ばれ、教壇から降りて教室の真ん中にある通路を走り、学生を追いかけられた。逃げ足は学生が速かったが、先生はすぐに教壇に立ち戻り講義を続けられた。この一瞬は今でも鮮明に覚えている。退出する学生を追いかけ、連れ戻そうとする教師は、今の大学では皆無に等しいだけに、先生はどんな気持ちで教壇を降り学生を追いかけられたのか伺うことができないのは残念である。』<sup>5)</sup>

4) 『1965年教授要目』より。

5) 橋本（旧一柿）卓爾「入江先生の思い出」『温山会報』第62号、2020年2月、37頁。

本年のゼミ1には、一柿〔橋本〕卓爾、中村、戎谷、川原、小西陽一（学生新聞部）、貞方政樹（学友会）、寺尾、西岡、増田、松田光男（柔道部）、村上、横田らが入った。

ゼミ1のテキストはハロッドの『景気循環論』（宮崎他訳）の輪読であった<sup>6)</sup>。一柿卓爾も「ゼミ1のテキストはハロッドの『景気循環論』でした。恐慌とは何かについて議論したことを思い出します。ゼミ生がよくわからないまま議論するのを先生は楽しみながら聞いていた感じです」と述べている。また、一柿は個人的にも入江先生宅を訪問し、食事をごちそうになったり泊めていただき、3年生の後期に資本論のドイツ語版を読むように勧められ、全3巻を取り寄せて貰ったという（一柿卓爾よりの聞き取り）。

ゼミ2（大塚潮治らの学年）のテキストはケインズの『一般理論』とハロッドの『動態経済学序説』（鈴木他訳）であった<sup>7)</sup>。

また、入江先生は資本論研究会を指導し、ゼミ連顧問も続けていた。

さらに、教職員会の委員長を務められた。なお、このとき稲生晴、神森智氏も委員を務め、極めて強力な教職員会となり、増岡理事長ら大学当局に対し、要求書を突きつけた、という<sup>8)</sup>。

4月、入江先生は新聞学会の編集子の依頼により、新入生に「私の奨める本」を3冊紹介している。それは、①マルクス・エンゲルス著、大内・向坂訳『共産党宣言』岩波文庫、50円、②ケインズ著、塩野谷訳『雇傭・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社、850円、③ベトナム外文出版社編・日本ベトナム友好協会訳『南ベトナムからの手紙』新日本新書、200円、である。そして、その書物の推薦理由を次のように記している。入江先生の実直な人柄が窺われる文である。

---

6) 『1965年教授要目』より。

7) 大塚潮治「入江先生とともに」『つくし』第25号、2000年7月、26～27頁。

8) 稲生晴「入江先生と私」『入江 奨教授記念号』（『松山商大論集』第5巻第5号、1993（平成5）年12月）。

「一緒に読んでみたい本は沢山あります。3冊に限定されると弱ります。思い切って、学術書という条件を捨て、僕達の魂と直接に結びつき得るような、ぼく達の生きる悩みと交流し、肌にじかに触れ得るような、そういう本を選べばどうなるかを考えました。ケインズの『一般理論』も、そういう書物として、ここに挙げました。ケインズ思想とマルクス思想とは、勿論、まるで異なります。けれども、両者に共通しているものは、危機意識です。そこに流れているのが生きる悩みです。これ等の書物を繰り返し読み、彼らの考え方をよく検討し、我々の実践的研究方法、あるいは研究方向を見定めることが大事ではないかと思えます。社会科学では歴史的發展法則に注目することが常に必要です。歴史の流れに抵抗しようとしても常に失敗するでしょう。ただ歴史の發展法則を曇りのない眼でとらえることは、勇気のいることだと思います。マルクス・エンゲルスの書とケインズの書を共によく検討する中で、ぼく達はその勇気の内容にまで立行って考えさせられることでしょう。南ベトナムからの手紙は、火を吹いている地域の若い人、婦人、子供、老人の生活の真実を如実に伝えてくれます。ここにあるのは、文字通り、人間として明るい平和を求める人達の、平凡な人間の叫びです。それだけに、ぼく達の胸を打たずにはいないでしょう。遠い彼方の人達のこととは思えません。全く身近な人達のことです」<sup>9)</sup>

6月11日、松山遺族会館にて平和憲法を守る集会が開かれた。会場には憲法に関心を持つ商大生40人ばかりが集まった。入江先生と愛媛大学の汲田教授が講師を務められた。両氏の講話のあと話合いに移り、現在の憲法は占領軍の押しつけ憲法だから政府自民党のいうように改正するのが適当か、日米安全保障条約と平和憲法との矛盾、九条の戦争放棄、憲法改正の真の意図はなにかなどが議論され、平和憲法をまもるために民主勢力が国会で3分の1以上の議

---

9) 『松山商大新聞』第132号、1965年4月30日。

席を確保し、安保反対国民会議を再び組織し、安保条約を破棄することを確認している<sup>10)</sup>

6月26日に研究センター（5階建）が竣工した（なお、2017年度に取り壊され、今はない）。入江先生はセンターの3階の研究室に移った（以後、退職まで）。

本年度も、学生の自主的な研究活動ならびにその発表の場である第12回全日ゼミ、第11回西日本ゼミ、第5回中四国政経ゼミが開催され、経済研究部や経営研究会等が積極的に参加したとおもわれるが、その参加状況は不明である。

9月18日、増岡理事長ら大学側は、来年度から経済学部、経営学部の定員を従来の各150名から各250名に増やすことを文部省に申請した。そして、12月27日、文部省によって定員増が認可された<sup>11)</sup>

1966（昭和41）年1月、入江先生は経済学史学会西南部会において、「スミスの労働体系論」について報告している。それは、「スミス経済学に内在する、内部的矛盾を含まない統一された理論体系が労働体系論としてとらえられるという見解を、国富論第一編全体に関して、提起する報告。その理論体系の中心におかれた価値法則論には、『未獲得財』範疇をふまえた既獲得財の（自然的）労働価格体系論という統一的論理があるということをはっきりと示すことに力点が置かれた」報告であった<sup>12)</sup>

2月中旬、1966年度の入試が行なわれた。文部省定員は、本年度から経済・経営とも1学年各250名に増大した。しかし、募集人員は定員を100名上回り、両学部とも350名であった。経済学部の志願者は1,672名であった<sup>13)</sup>

3月19日、第15回松山商大卒業式が行なわれ、商経学部43名、経済学部224名が卒業した<sup>14)</sup>

10) 『松山商大新聞』第134号、1965年7月7日。

11) 国立公文書館『松山商科大学学生定員変更』書類より。

12) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

13) 『六十年史（資料編）』173頁。

入江ゼミでは江藤、大山、兼久、仙波、高須賀、中臣、中山、大塚潮治（経済研究部、ゼミ連、学友会）ら25名が卒業した。

3月31日に2号館（現、2階建）が竣工した。

## 16) 1966（昭和41）年度

入江先生赴任16年目である。42歳から43歳にかけての時期である。本年4月から入江先生は学校法人の評議員に就任した（～1989年3月）。また6月1日から経済研究所の所長に就任する（～1967年5月31日）。はじめての役職であった。

学長は増岡喜義が続け（3年目）、経済学部長は伊藤恒夫（2年目）が続けた<sup>1)</sup>。

4月9日午前9時より入学式が行なわれ、経済学部455名が入学した。文部省定員、募集定員を大幅にオーバーして入学させた。すさまじいマス・プロとなった。増岡学長は式において、創立の三恩人を讃え、大学とは学問の場、人間修養の場、自由と自主性の尊ばれる場であり、校則を守り、本分を守ること、そして、校訓「三実主義」の内容を説明し、大学生活が実り多きものとなるよう希望を述べた<sup>2)</sup>。この時に入学した一人に芳野俊郎（1966年4月入学、1968年4月岩田ゼミ、1970年3月卒業、1973年4月大学院修士課程入学、入江ゼミ）がいる。

本年4月、増岡学長は「第2次学園長期計画委員会」を組織した。

本年度、定員増に伴い、新しい教員が採用された。経済学部では田辺勝也が社会政策各論の担当の講師として、井上晴彦が英語担当の講師として採用された。また増田豊が英語担当の助手として採用された<sup>3)</sup>。また、10月1日に外国経済論の担当として小松聡が経済学部で採用された。

14) 『松山商大新聞』第139号、1966年4月25日。『六十年史（資料編）』141頁。

1) 『六十年史（資料編）』126～131頁。

2) 『松山商大新聞』第139号、1966年4月25日。『六十年史（資料編）』173頁。

3) 『松山商大新聞』第140号、1966年6月6日。

本年4月から教養ゼミが開講されることになった。経済学部では教養ゼミ受講者のみ年間履修単位を52単位にまで広げることになった。本年度は、伊藤恒夫、入江奨、小原一雄、伊達功、藤田貞一郎、望月清人、安井修二が開講した。

本年度の入江先生の授業科目は、前年と同様、一般教育科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、短大の経済学で、そして教養ゼミが加わった。本年度の一般教育科目の経済学の教授要目について次のように述べている。

「資本家の走狗であることを自認する経済学者はいないが、にも拘わらず、経済学の階級的性格は否定し得ない。同じ時期に同一の経済現象を取扱うにも拘らず、すべての経済学者が同一の分析方法、同一の接近方法をおこなう状態になっていない。経済学の初歩的段階に足を踏み入れるにあたって、如何に初歩だからといっても、この事態に眼をふさぐことはできない。

とはいえ、その何れかに徹した講義をすることは一般教育の観点から考えても、また、基礎教育の点から考えても、好ましくないと思われる。

そこで人類経済の動向、日本経済の動向をたえず、考慮しながら、経済学がどのような問題にどのような答えを準備しながら進もうとしているかについて、その輪郭を伝えることにする」<sup>4)</sup>

そして、経済学のテキストは自製の講義案を用い、その具体的内容は、おそらく前年度と同様であったと思われる。なお、参考書も前年度とほぼ同様で、A・スミス『国富論』岩波文庫、D・リカード『経済原論』同、Y・アカデミー『経済学教科書』新日本出版社、『近代経済学講座(1)近代経済学入門』有斐閣、豊田・佐藤『現代史入門』合同出版社であった<sup>5)</sup>

4) 『1966年教授要目』。

5) 同。

専門教育の経済学史の教授要目について次のように述べている。「経済学の流れを、経済理論－経済問題のとらえ方、経済の体系的理解－の変遷に重点をおいて考察する。重商主義段階から始めるが、古典派解体－近代経済学の形成期に、力を注ぐことができるような時間の配分にしたいと考えている」<sup>6)</sup>

そして、経済学史のテキストは自製の講義案を用い、その具体的内容は前年とほぼ同様であったと思われる。参考書も前年度とほぼ同様であった<sup>7)</sup>

本年のゼミ1には、吾郷、伊藤紘一（学生新聞部）、大成平八郎（ゼミ連）、小原、高田、戸田、原田、東、大原らが入った。

ゼミ1のテキストはHarrodの『The Trade Cycle』であった。そして、秋の中四ゼミやインゼミに取り組んでいる。ゼミ2（一柿卓爾らの学年）のテキストはKeynesをテキストとして使用している<sup>8)</sup>おそらく『一般理論』であると推測される。そして、ゼミ2では卒論の指導もした。一柿は卒論について「ゼミ生20名に卒論テーマを課し、丁寧に指導されていました。…私は、日本農業の現状と課題について当時注目されていた『二重構造論』（長洲他）の視点で書きましたが、二重構造論の視点だけでは不十分だと指摘され、もっと深い分析をすべきだと指摘されました」と回想している（一柿より聞き取り）。

また、本年開始の教養ゼミについて、入江先生は大意次のように述べている。

「教養ゼミを全教科のなかでどのように位置づけるか、未だ我々の統一見解は生まれていない。しかし、次の三点は明らかである。(1)学生の強い要求が開講の基礎になっていること、(2)抽象的、一般的には、我々教員も、学生指導の観点から開講の必要ありと考えていたこと、(3)十数年前の教養ゼミと〔比較すると〕、専門科目の担当の教員も開講者となっているという点で異なっていること。

---

6) 同。

7) 同。

8) 同。

我々が開講の必要ありと考えた主要な理由の一つは、大学生に真に研究学徒と言われ得る学生生活の経験の機会を、一日でも早くから、与えたいと考えていること、そのことによって、大量教育・非大学的非研究的教育の弊害を少しでもなくそうと考えていることにある。（中略）

だからこそ、専門科目担当者が教養ゼミを担当することにも意義があると考ええる。

以上の観点から、社会科学の基礎を、共に、考えていきたい、と思っ  
ている。

唯物弁証法、実践論、矛盾論、あるいは国富論などから受講生と相談してテキストを決め、当面輪読報告形式で進めてみたい<sup>9)</sup>

そして、この教養ゼミに4年生の小西陽一が出席し、イントロ役をしている。小西は「私が四回生の時、大学が始めた教養ゼミ（一、二回生対象）に、先生の薦めもあって参加させていただくことになりました。そして、教養ゼミのイントロ役を仰せつかり、説明するための下調べ、説明の仕方、レジメにまとめていく作業など先生のご指導を仰ぎつつ、行ったことが、自分が進んで自分のための勉強をする契機となりましたし、また先生との触れあいを深める契機となりました。この経験は、大学生活の思い出の最高の一つです」と回想している<sup>10)</sup>

また、入江先生は引き続き資本論研究会を指導し、ゼミ連の部長を続けていた。

4月、入江先生は、堀経夫博士古稀記念論文集編集委員会編『経済学・歴史と理論』（未来社、1966年4月）に、「マルサスの『人口論』について」を執筆した。この論文の概要について、入江先生は後に次のように述べている。

---

9) 『松山商大新聞』第138号、1966年1月14日。

10) 小西陽一「入江先生との触れ合い」『つくし』第25号、2000年7月、28頁。



「マルサスの人口論を絶対的過剰人口論として理解することはマルサスの意図したことをとらえたことにはならないという見解を示し、むしろ、それを一種の相対的過剰人口論としてとらえ、『人口論』と『経済学原理』が陰陽の関係にあるものとしてマルサスの全体系の内部の論理構造を究明する必要があるという考え方を提起している」<sup>11)</sup>

また、4月、入江先生は『松山商大論集』第17巻第1号に「スミスの地代論」を発表した。この論文の概要について、入江先生は後に次のように述べている。

「『国富論』の理論体系における地代論の位置づけいかんという観点でその内容の積極的解明をおこなっている。基本的収入源としての、従って純粹概念としての、地代という認識に基づく議論であったという見解、地代は需要の結果であるという考え方がその中心になっているという見解、需要の結果である地代は、自然的地代＝自然価格体系に内包される地代のことであったという見解、その地代論は、その内部に豊度要因や位置要因に関する諸議論を内包しているが、全体として、『需要の結果』論という形で集約すべき、統一的原理をもっていることにならざるをえないという見解を提起している」<sup>12)</sup>

6月1日、入江先生は経済研究所所長に就任した（～1967年5月31日）。初めての大学での役職であった。

11月3～5日にかけて、第6回中四国学生政経ゼミナール大会が本学で開催された。この大会開催に向けて、ゼミ連と第6回中四国政経ゼミナール大会実行委員会が「松山商大セミナー新聞」を発行している。それによると、大会

---

11) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

12) 同。

実行委員長は岡本勝士，副委員長は阪本光弘，総務部長は窪田滋穂，企画部長は大成平八郎（入江ゼミ），議長団長は村上克成で，その下に書記らが多数いて，大会を運営した。そして，中四国から10大学，550名が参加した。松山商大からは29のゼミ，経済研究部，社会科学研究会等が発表した。入江ゼミもマルクス経済学部門の共通テーマ「国家独占資本主義と恐慌」を発表した<sup>13)</sup>

また，11月下旬の第13回日本学生経済ゼミナール大会には，経済学部の太田，入江，安井，田辺，経営学部の元木，高沢の各ゼミ及び社会科学研究会が参加した<sup>14)</sup>

経済研究所所長に就任した入江先生は，研究所主催の学生及び一般市民対象の土曜講座を企画した。第1回の11月19日には伊藤忠商事取締役の山本計市氏を招き，「日本経済の将来」についての講演，第2回は12月10日，本学経済学部講師の宮崎満が「現代日本の交通問題」と題し講演している<sup>15)</sup>

ここで，愛媛県政について触れておこう。翌年の1月で4期続いた久松定武知事(自民)の任期が切れるため，第6回知事選挙が行なわれることになり(1967年1月1日告示，26日投票)，久松は5選出馬を決めた。それに対し，革新陣営は個人的人望の高い社会党代議士の湯山勇を候補とし，湯山は党籍を離脱し，社共統一で立候補し，保革一騎討ちとなった。

そして，愛媛の文化人たちも湯山候補を応援すべく，12月，「愛媛民主市民の会」を結成した。代表幹事は坂本忠士(劇作家)で，幹事に入江奨，小林登，川本健二，合田千里らがなっている<sup>16)</sup>。このように，入江先生は知識人・文化人の社会的役割として，愛媛県政の民主化運動にも関わっていたことがわかる。ただし，選挙は，革新側の敗北に終わった。

12月8日，増岡学長の任期が年末で満了するので，推薦委員会で候補者の

---

13) 『松山商大新聞』第143号，1966年11月1日。第145号，1967年1月24日。「松山商大セミナー新聞」(小西陽一さんより提供)。

14) 『松山商大新聞』第145号，1967年1月24日。

15) 『松山商大新聞』第144号，1966年12月20日。

16) 『愛媛県議会史』第6巻，1993年3月，島津豊幸編『愛媛県の百年』335頁。

選考がおこなわれ、増岡教授一人を推薦し、学長選挙がおこなわれた。投票の結果、信任票が投票総数60票の3分の2に1票足らず、信任されなかった<sup>17)</sup>。そこで、学長選挙は白紙に戻り、改めて推薦委員会が組織された。新推薦委員会では、増岡教授と八木亀太郎教授の2人を候補者とし、12月27日に投票がおこなわれ、増岡教授が過半数を得て、再選された。

1967(昭和42)年1月1日、増岡喜義学長・理事長が再任された。このとき、増岡教授63歳であった。増岡学長は再任の辞で、私立大学はマスプロや教授と学生との人格的ふれあいや大学当局と学生との疎遠化など多くの課題をかかえているが、これらを解決して本学を確実に発展させていきたいと述べている<sup>18)</sup>。

2月、入江ゼミ4年生は卒業ゼミ旅行として、高崎山と別府温泉を訪れている(小西陽一さんより)。

2月19日、1967年度の入試が行なわれた。経済学部の募集人員は前年度と同じく350名で(文部省定員は250名)、志願者は1,554名であった。2月28日に合格発表がなされた<sup>19)</sup>。

2月28日、長期学園整備計画の一環である体育館(第1体育館)が竣工した<sup>20)</sup>。

2月、伊藤恒夫経済学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、伊藤恒夫教授が再任された。

3月下旬、第16回松山商大卒業式が行われ、商経学部9名、経済学部303名が卒業した<sup>21)</sup>。

入江ゼミでは一柿〔橋本〕卓爾、中村、戎谷、川原、小西陽一(学生新聞部)、貞方政樹(学友会)、寺尾、西岡、増田、松田光男(柔道部)、村上、横田ら

---

17) 『松山商大新聞』第144号、1966年12月20日。

18) 『松山商大新聞』第145号、1967年1月24日。

19) 松山商科大学『昭和42年度募集要項』『六十年史(資料編)』173頁。

20) 『松山商大新聞』第145号、1967年1月24日。

21) 『六十年史(資料編)』141頁。

19名が卒業した。なお、『松山商大新聞』第146号（1967年3月20日）に、柔道部で活躍した松田光男、学友会で活躍した貞方政樹が卒業にあたり談話を寄せている。また、一柿〔橋本〕卓爾はマルクス経済学を学ぶには大阪市立大学大学院にいくのがよいと入江先生より勧められ、進学した。

### 17) 1967 (昭和 42) 年度

入江先生赴任17年目である。43歳から44歳にかけての時期である。学校法人の評議員を続けている。また経済研究所の所長を本年5月31日まで続けている。

学長は増岡喜義が続けた（5年目）。経済学部長は伊藤恒夫が再任され、2期目を続けた<sup>1)</sup>

4月8日、入学式が午前10時より完成直後の体育館にて行われた。経済学部399名が入学した。増岡学長は式辞で、本学の三実主義を指針として、清らかな清流をぐんぐん上っていく若アユの様な学生生活を期待する、と述べた<sup>2)</sup>

本年度、経済学部は新しい教員として、水地宗明が講師（哲学、論理学、倫理学）として、中原成夫が助手（ドイツ語）として採用された<sup>3)</sup>

本年度の入江先生の授業科目は、前年と同様、一般教育科目の経済学、教養演習、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。なお、一般教育の経済学は岩田裕講師も担当するようになった。

一般教育科目の経済学について、入江先生は教授要目で次の如く述べている。

「社会科学には常に何等かの程度で段階的性格がそなわっている。そのために、万人が承認する経済のとらえ方は、資本主義社会という階級社会においては、形成されていない。けれども、基礎学科の性格をもっている

1) 『六十年史（資料編）』125～131頁。

2) 『松山商大新聞』第147号、1967年5月15日。『六十年史（資料編）』173頁。

3) 『松山商大新聞』第147号、1967年5月15日。

『経済学』の講義では、様々な経済の考え方を学ぶ機会が与えられなければなるまい。一定の見解に立脚して、経済の道程をあきらかにするなかで、可能な限り、他の諸見解にもふれ、同時に諸見解の位置づけにも配慮していきたい<sup>4)</sup>

そして、その具体的講義内容は、ほぼ前年度と同様、(1)貨幣経済の体系、(2)資本制的再生産の基礎構造、(3)資本の運動の社会的構造、(4)資本の運動の法則的な展開過程、となっており、参考書も前年とほぼ同様であった<sup>5)</sup>

専門教育科目の経済学史の教授要目は次の如くであった。

「経済理論の形成、変遷の過程として、経済学の歴史をとらえていく。

重商主義の生成

古典派経済学の生成、発展、転化

マルクス経済学の形成過程

近代主義経済学の形成過程

という4つの柱で、学史の流れを整理し、諸経済理論の関連を歴史的にあきらかにしていく<sup>6)</sup>

その講義内容は前年度とほぼ同様で、また、参考書も前年度と同様であった。

本年のゼミ1に、石津、板谷、石村、犬飼、岩崎、岡部、片山、菊池、小島、竹川猛、田中、中野、中矢、林、穂板、松村、丸山、宮武、村上、横田、渡部、清水、長楽和代らが入った。

ゼミ1のテキストは、ハロッドの『景気循環論』『動態経済学序説』、ドーマーの『経済成長の理論』であった。竹川猛はゼミ1について「I部の時の研究

---

4) 『1967年教授要目』。

5) 同。

6) 同。

テーマ『ハロッド』は、僕にとって全然歯が立たなかった。いや歯が立たないといえば嘘になり、最初だけ少しみてそれ以後あきらめて投げ出したのだ」と回想している<sup>7)</sup>

ゼミ2のテキストもハロッドで、さらに個別研究を推進させ、それが卒業論文に結びつくような指導をしていた<sup>8)</sup>

ゼミ活動として本年も中四ゼミ、西日本ゼミ、インゼミが開催されており、取り組んだと思われる。西日本ゼミでは、国家独占資本主義論について報告しているが<sup>9)</sup>、その他は不明である。

また、入江先生はゼミ連の顧問を続けている。

4月、入江先生は『松山商大論集』第18巻第1号に「マルサスと古典学派」を発表した。この論文の概要について、入江先生は後に次のように述べている。

「マルサスとリカドウの経済学の基本的性格は、階級的性格の観点から把握しなければならぬものか、仮にそうだとすれば、両者は同じ古典学派に属するものとみられ得るか、という問題意識でおこなわれた研究作業。ケインズの思考が誤っているという見解、リカドウと論争したマルサスの理論が『古い社会』に基盤をもつ地主階級的性格のものであることはたしかだが、マルサスは『新しい社会』の資本家階級の利益の排除を主張したのではなかったという見解、両者はむしろ共通の階級的基礎に立脚するものであり、両者の理論の階級的性格は副次的なものであるという見解、両者の対立は古典学派の内部矛盾のあらわれとして、受けとめるべきであるという見解が、提起されている」<sup>10)</sup>

---

7) 竹川猛「ゼミ反省」『つくし』第2号、1969年3月10日、23頁。ゼミ1生の名簿は『つくし』創刊号、1968年3月にある。

8) 『1967年度教授要目』。

9) 『つくし』第2号、1969年3月10日、4頁。

10) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

5月31日、入江先生は研究所の所長をおり、稲生晴に代わっている。1年間の短期であった。

本年は、佐藤栄作内閣時で、佐藤内閣はアメリカに追随し、南ベトナムを支持し、その政治姿勢への批判が全国的に盛り上がっていた。10月8日、佐藤首相が南ベトナムを含む東南アジア訪問に出発し、三派系全学連が抗議デモを展開し、警官隊と衝突し、学生一人が死亡する事件が起きた(第1次羽田事件)。また、11月12日、佐藤首相は米国訪問に出発し、この時も三派系の全学連が空港周辺で警官隊と衝突した(第2次羽田事件)。本学の学生たちも佐藤の訪ベトに反対で、デモに参加している。この時、3年生であった新聞部の伊藤紘一も参加している。伊藤の一文を紹介しよう。

「昨年(注、1967年)10月9日、クラブの大洲合宿2日目朝だった。『おい、学生が一人殺されたぞ』朝刊を買いに行っていた1年生の声は少し上擦っていた。予想通り、紙面には三派系全学連と暴力という活字が散乱していた。佐藤訪ベトの意図は欠片さえ見られなかった。合宿が終わってから数日後、その日は午後から段々風が強くなり、いまにも雨が落ちてきそうな空模様だったと覚えている。僕は友人のOとKと共に佐藤訪ベト抗議愛大集会に出席していた各代表の決意と総括が述べられた後、予定通り、市内デモに出発した。東雲神社前を通り、一番町に出て、自民党県連前で5分ぐらい坐りこんだだろうか。そして、市駅前で警官とぶつかり、また隊列を整えて、35名余りのデモ隊は銀天街へ吸い込まれていった。佐藤訪ベト抗議のシュプレヒコールをやりながら(中略)。11月12日、佐藤がアメリカへ旅立つ日だった。その日もぼくはOやKら、数人の友人と佐藤訪米阻止愛大集会に出席し、前回と同様、市内をデモ行進した」<sup>11)</sup>

---

11) 伊藤紘一「ほんとうの愛への出発」『つくし』創刊号、1968年3月。

11月25日、入江先生は新聞学会の編集部の依頼に応じ、『松山商大新聞』第150号に「『資本論』出版百年 今日におけるその存在意義」を投稿している。マルクスの資本論についての入江先生の初めての活字論文であった。その全文を紹介しよう。

「一八六五年末に『資本論』全巻の大要をかきあげたマルクスは、六六年一月一日以降、第一巻の清書と文体のねりなおしに従事し、六七年三月二十七日完了。この間マルクスはインタナショナルの会議や自分の病気、ひどい貧乏のなかで仕事をした。六七年五月五日、誕生日に『資本論』の最初の校正版をうけとつた。第一巻初版本が六七年九月一四日に千部刊行された（『経済』、一九六七年五月臨時増刊号、『資本論』年表）。

『資本論』の全巻の刊行は、マルクスの予定をはるかに超え、エンゲルス更にかウツキーに委ねられた遺稿を基にして、一九一〇年にやっと結びとなつた。カウツキー版剰余価値学説史に対する批判的改版がドイツ語原文で刊行されたことを考慮すれば一九六二年に結びになつたと見なければなるまい。とはいえ、『資本論』の真髄は第一巻に基礎的なものとして盛られていた。以来、百年が経過したのである。

#### サロン・講壇・実践

翻訳された言語の種類が多いこと、原版の種類が多いこと、そして同一言語への翻訳本の種類が多いこと、更には、翻訳を含んだ発行部数の多いことで、またそれに関する研究論文数の多いことでも『資本論』に比肩できるものは極めて稀ではなからうか。直接、間接に『資本論』を読み、あるいはその見解に関心を寄せた者は、おそらく地球のほとんどの地域に居るだろうし、その数は幾千万にのぼるだろう。否、幾億にのぼるのではないか。そしてその数は今後ますます増加すると思われる。いかなる民族解放運動も反戦運動も、否、様々な生活改善運動でさえも、『資本論』の見解とまったく無縁ではあり得ないからである。



『資本論』を読んで難解さに頭をかかえない者はおそらく皆無だろう。にもかかわらず、驚くべきことに、『資本論』に関連した書物が最もよく売れると本屋さんが言っていた。その真相はともかくとして、『資本論』への関心は今年は特に高められたのではあるまいか。出版百年を記念して日本だけでも何百という企画や催しが実施されているように思われる。松山商大新聞のこの企画もその一環をなすものである。

このような動向をもつて、マルクスの見解が順調に受けいれられつゝある証拠とすることができるだろうか。

幾千万、幾億の人がマルクスの見解に関心を寄せると言っても、彼等のすべてが『資本論』を読んでいると考えれば、それは誤りである。彼等の大部分はおそらく『資本論』にふれたこともないであろう。あるいはマルクスの名前を知らぬことさえ相当にあるだろう。にもかゝらず彼等はマルクス・レーニン主義で理論武装した前衛と共に歩んでいる。それぞれの自発性に立脚しマルクスの示した法則を、農民は農民なりに、労働者は労働者なりに、市民は市民なりに、自分たちの生活に、自分たちの言葉に翻訳しながら、共に歩んでいる。マルクスの見解が実践の場を通して把握され、マルクスが発見した法則の具現者となつている。

むしろ問題は、『資本論』を直接、間接に読み、研究する者、『資本論』を書物として買う者の方にある。

サロン・マルキストとか講壇マルキストと言われる人々、あるいは様々なマルクス批判家たちが、その部類から生まれてくる。彼等は概ね批判的精神が旺盛である。

『資本論』には「経済学批判」という副題がついている。「批判」はマルクスの真骨頂であつた。

だから、批判的精神の旺盛なことは、マルクスの見解に直接に接する者に要求される最低の要件でさえあるだろう。

けれども批判は全面的体系的法則的になされる必要がある。部分的假定

的恣意的批判に止まることは十分に自戒しなければならない（と私は自分に、マルクス批判を口にすることがあるだけに、言い聞かせている）。『資本論』の全体をとらえずに『資本論』批判を口にする者が少なくないが、それは全く非科学的である。

マルクスは俗流経済学に対して、全く容認しなかつた。実践と無縁な形でマルクスを論ずる者は、その理由をよく検討する必要があるのではないか。

『資本論』が明らかにしたこと

『資本論』は単なる経済分析の体系ではなかつた。そこには、思想の問題も方法論の問題も含まれている。人間とは何ぞやという視点が徹底して追求されなかつたならば、マルクスの価値法則論もおそらく形成されなかつたであろう。

人間論はケネーにもスミスにもあった。だが、彼等は人間の視点を徹底的に追求することを、途中で放棄した。労働者の生活の問題にまで徹底して入りこむことをせず、土地や資本への協力という段階でふみ止まり、人間の生活の自然史的過程に、歴史的にメスを入れることをしなかつた。

哲学者として出発したマルクスは人間の生活を徹底して考えようとした時、経済問題に眼を向けざるを得なかつた。

経済についての研究のなかでマルクスの方法論、弁証法的唯物論が完成し、史的唯物論がつくり出された。

この方法論の完成によつて、古典的経済学の徹底的改造、資本主義社会の解剖学的研究が可能となつた。

『資本論』の最終目的は近代社会の経済的運動法則を明らかにすることであつた。資本主義的生産様式の歴史的な性格を明らかにし、資本主義の発生、発展、滅亡の法則を解明した。

資本主義の発展そのものが社会主義を実現する物質的条件をつくり、かつ主体的条件をもつくり出すことを明らかにした。

第一巻，第七編，第二十四章，第七節，「資本制的蓄積の歴史的傾向」において，その法則性が極めてまとめられた形で述べられている。

マルクスは「資本制的生産そのものの内在的諸法則の作用によつて」これ等の諸条件が成熟していくことを示した。マルクス以前には，資本の蓄積過程をこのような形で論じた者はいなかつた。

マルクスのいわゆる俗流経済学は勿論のこと，古典学派でさえも，資本制蓄積の法則をこのように深めることはできなかつた。その理由は，彼等が資本制生産の基本的経済法則を把握し得なかつた点にある。あるいは把握しようとしなかつた点にある。利潤を与件化し，その量的変動にのみ眼を奪われたのでは，利潤を法則的に把握したことになる。古典派の基本的限界はここにあつた。その限界を克服したのがマルクスであつた。

それを可能にしたのは，マルクスの価値法則論であつた。リカアドゥの価値論をふみこえたマルクスの価値論であつた。

価値法則論，剰余価値生産法則論，そして資本的蓄積法則論，これが『資本論』の示した三本の柱であり，その根底にマルクスの人間論と弁証法的唯物論があり，その総体として資本制経済の発展法則があつた。

#### 『資本論』の様々な受けとめ方

『資本論』は資本制社会における階級関係を明らかにし，階級矛盾の法則性を示し，資本制社会の変革の必然性を抽出し，変革の諸条件を一般的に究明した。従つて資本家階級に受け入れられないのは当然であつた。最初から党派性を明らかにした理論であつた。そのことを反映して，様々な受けとめ方が生まれて来た。

マルクスが事実上俗流経済学と規定することになるであろうと思われるグループからは，『資本論』の理論体系の整合性の欠如という批判が加えられた。第一巻と第三巻との矛盾という批判などであつた。しかしその批判は，リカアドゥ価値論とマルクス価値論との発展関係を十分に理解しない状況で提起されているように思われる。

これに類した接近法に、『資本論』のなかの利用し得る命題なり分析過程なりを吸収しようとする受けとめ方がある。資本制経済の発展法則を解体する結果になつているのが、その通例であり従つて『資本論』批判の一類型である。

自称マルクス経済学者のなかにも、様々な受けとめ方がある。『思想』一九六七年五月号の大内力氏の所論を見てもその感を深くする。何故だろうかという疑問と共に、完全に親切な説明をマルクスがしていると断言する自身も私にはない。と同時にマルクスの示した法則なり命題が現代の段階で適用しなくなつたとすれば、事は重要であると感じると共に、そのように考えるのであれば何故にマルクスとの断絶を明言しないのであろうかという素朴な感想ももつ。

「今日におけるその存在意識」というテーマが、『資本論』の歴史性を問うという内容のものであり、それが現段階では妥当し得なくなつたという内容を含むとすれば、その内容は私の受けとめ方とは全く異なる。細部については理解し得ないところが数多くあるが、それは私の研究が充分に進んでいない結果であろうと考えている。『資本論』の示す法則、命題について内在的に根本的な疑問があるとか現段階の諸状況から見て妥当し難くなつたとか考えてはいない（論拠を示し具体的に論ずる余地は全くないが）。

#### 百年が含む時代の変化

マルクスが『資本論』を書いた時期と現代との間には、たしかにいくつもの重要な変化がある。「資本主義的自由競争に資本主義的独占がとつてかわつたこと」、社会主義諸国が資本主義の殻を破つて成立したこと、国家独占資本主義が成立したこと、などが注目される。

殊に、国家独占資本主義が成立したことは、恐慌過程を著しく変容させ、高度経済成長とそれに照応する産業予備軍の変容をもたらし、これ等の諸変化の反映として資本主義がバラ色に描かれることになり、なしくずし移

行論が唱えられるようになった。

『資本論』に対する様々な受けとめ方の発生の土壌は、このような形で、具体的な現実過程として存在している。

これ等の変化にもかかわらず現実過程分析の理論として『資本論』は充分なものと言えるのだろうか。

ここで我々はマルクスのプランの問題を想起する必要がある。マルクスは、資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場という構想で経済学批判を展開しようとした。資本の項は、更に資本一般、競争、信用、株式資本という項目を含んでいた。この構想が全面的に『資本論』のなかで具現されているとは言えない。従つて、独占以前の段階であつても、個別的現実的過程に関する分析理論としては多くの不十分さを含んでいることを、マルクス自身が自覚していたと見なければならぬ。だから『資本論』だけで充分と言えないことは当然である。

独占段階以降になれば、それに相応した法則の抽出が必要となつてくる。

問題は、『資本論』で示された諸法則をその場合にどのように把握するかにある。基本的一般的に貫徹するものとして受けとめるか、あるいは過去のものとして評価するか。教条、修正、創造的発展。この3つの方向がある。修正と創造的発展とのちがいを明確にする必要がある。

修正の方向と創造的発展の方向のちがいを鮮明に示した例が、レーニンの『帝国主義論』におけるカウツキー批判であつた。レーニンは「帝国主義は、資本主義一般の基本的諸特質の発展およびその直接の継続として生じた」と規定し、カウツキーが帝国主義を現代資本主義の政策の一形態にすぎないと見ていることに対して、「資本主義の最新の段階のもつとも根本的な諸矛盾をあばき出すかわりに、それらを塗りかくし、…マルクス主義のかわりにブルジョアの改良主義が得られる」と批判している。

資本制蓄積法則、資本制社会の変革の必然性に関する法則は、それが長期的一般的発展法則である結果として、資本制社会の犠牲の段階における

諸矛盾を抽出し得るように具体的な形態で把握されなければならない、資本主義的自由競争が支配的な段階では、資本主義の基本的特質が直接に現われる。けれども、資本主義が高い段階に達し、資本主義のいくつかの基本的特質がその対立物に転化しはじめると、その結果として、新しくより激烈な矛盾が生まれてくる。それに照応して法則もより具体的な形態でとらえなければならなくなる。

マルクス主義の創造的発展が唱えられることが昨今少なくないが、帝国主義段階における国家独占資本主義という規定を更に取りこえなければならぬような変化が新しく生まれているのかどうか。私は疑問をもっている。

『資本論』を学ぶ眼

『資本論』で示された近代社会の経済的運動法則には、物質的条件の働きと主体的条件の動きとが統一的に含まれていた。これは変革の法則とも呼ばれ得るだろう。この法則を無視して『資本論』を読めば、換骨奪胎に等しいことになるだろう。そして、この法則が『資本論』においてもつ地位を充分に考慮すれば、『資本論』に還つてその研究方法に学び、そこで示された基本的諸法則が現代の諸特質の下でどのような作用形態、現象形態をとつているかを分析しようとする構えを、簡単には放棄し得なくなるのではないか<sup>12)</sup>

2月18日、1968年度の入試が行なわれた。経済学部の新入生は前年度と同じく350名で（文部省定員は250名）、志願者は1,466名であった。合格発表は2月27日になされ、649名を発表した<sup>13)</sup>

この年の春、入江ゼミは1968年度の新ゼミ生（予定）と今治近くのお寺でゼミ合宿をしている。テキストは『国家独占資本主義論』（有斐閣）であった<sup>14)</sup>

12) 『松山商大新聞』第150号、1967年11月25日。

13) 松山商科大学『昭和43年度募集要項』、『六十年史（資料編）』173、294頁。

14) 横田つとむ（1970年3月卒）「入江先生の訃報に接して」『つくし』第29号、2006年1月、26頁。

3月18日、入江先生の同窓会『つくし会』の機関誌『つくし』が創刊された（なお、同窓会の『つくし会』そのものは、1960年2月に結成されている）。発行所は松山商科大学経済研究センター入江研究室つくし会で、ゼミ4年生の大原瑛男（1966年4月ゼミ1に入り、1968年3月卒業）が発行者となっている。創刊号に入江先生が『『つくし会』成立にあたって』を書いている。それは次の通りであった。

「松山商大に二学部ができてから既に四年以上を經過し、昭和四十三年度には、松山商大史上はじめての一学部一学年四三〇名をこえる学生を第三年次生に迎えることになった。マス・プロの現実と少数教育の理想像との矛盾にあえぎ、ゼミ担当教員の増加に努めてきたものの、現状の是正はついに実現せず、定年に達せられた方々に囑託教授としてゼミの担当をお願いし、若手の講師の方にもゼミを担当してもらった。なおかつ、ゼミ担当教員一人平均二十四名のゼミ生を受けもたねば全員ゼミ履修を実現できぬ始末。その為に、遂に昭和四三年度は一部ゼミ生は三十名をこえることになった。私の理想像は七名ないし十名なのだから、つまり私の担当能力は七名ないし十名なのだから、学生諸君には甚だ申し訳ない状態になっている訳である。

『つくし会』成立に当って過去の状況を整理したところ、私がゼミ担当をはじめたのは昭和二十八年度、その時の一部生はたしか二名であった。二部生は四名であった。その当時は全くうらやましい。

この頃であれば、未だ大学教育とは何かについて悩むことも少なかった。私の学生として経験した大学教育と比べて、量的には変りがなかったからである。質的に見ても、思考訓練の場として大学を理解し得る状況にあった。

だが、今はちがう。量は質を変える。大学教育とは何かについて悩むことが日常茶飯事のことになってしまった。思考訓練を可能にする量には限

度がある。その限度をはるかに越えてしまっている。ゼミとは何だろうかと考えこまされている。なぜこのようになるのだろうかと考えさせられる。この事態がどのようなきっかけを招くかを考えさせられている。

この困難な事態のなかで、かすかながらも救いがないことはない。学生のなかに新しい気運が起きているからである。

学生の自主的な団結強化の工夫と自己訓練の姿勢の強化が、年々強められている。

サブ・ゼミ，ゼミ合宿，一部・二部の研究上の交流，などなど。

『つくし会』にしても、このような学生のゼミを守る自衛行動の自主的な強まりの空気の中で誕生したものとはいえないだろうか。

たしか宮島君の献身的な努力がなければ更に大きなものとなっていただろうし、『つくし会』の組織のために招集に応じて集まられた方々の努力がなければ、あるいは招集が全面的でなかったようなので言い直すのだが、招集に応じてそれぞれの業務のやり繰りをつけて集まられるようなOB諸君の気持ちがあれば、この会は未だ成立していなかったであろうと思われる。そうであるにしても、なおかつ、現役諸君の自主的行動の強化の流れと無関係に『つくし会』が成立したとは、とても私には思われないのである。（中略）

『つくし会』という名称について、誰かから説明があるかも知れない。が、『つくし』のいわれについて、当時、篠崎正男君が言った言葉は、今でも私の脳裡にやきついている。

少女趣味のようだが、『つくし』が、ふまれ、たたかれても、春になると芽をふき育っていく姿に、私は惹かれる。我々も今後そのような生活に徹していかなければならないのではないかと。彼はそのように言った。『社会の危機つまり『変革期』における我々の生き方がよく示されていると思われた。これもここで想い出しておきたい。

私も今年は、今年こそは、一段落の年にしたいと考えているのですが、



日々の仕事はなかなかその余裕を与えてくれそうにはありません。けれども今年こそはという気持ちを最も強めています。古典派研究にくさびをうつことがそのテーマです。

ともかく、お互いに、力一杯『闘い』のなかでの社会的連帯の一こまとして、頑張りましょう。『闘い』の内容については、今後、語り合う機会をもつこととして、社会的連帯の挨拶だけはすぐにでも、交わせるでしょう。

健康第一と思って、時に四〇腰に悩みながら、あいかわらず、テニスをやっています。]<sup>15)</sup>

そして、この創刊号には、『つくし会』の会長松沢宏（第4回、1955年3月卒、松山市役所）と副会長山崎全正（第5回、1956年3月卒、南海放送）が「入江ゼミの特徴」を記し、松沢宏は入江ゼミは「真面目な学生ばかりだ、そしてみんなよく勉強している。したがって優秀なやつばかりだ」とその特徴を述べ、山崎全正は先輩の渡部さんの影響で入江ゼミに入り、入江先生から学んだものとして、「超越的批判でなく内在的な批判を」という言葉だと述べている。また、4年の伊藤紘一が「学内近況」を載せ、1964年から1967年までの4年間における本学の長期学園計画の進捗状況（研究センター、総合グラウンド、2号館、体育館）について金額を含め詳細かつ批判的に述べ、また、時の増岡学長の学生への態度は曖昧であり、1966年1月から5月末まで続いた、学生会館ではなく体育館建設を強行した大学当局への批判、1967年の9月に出てきた授業料値上げ問題等について批判的に述べている。

また、「先輩からのたより」として、村木、萬井（第2回、1953年3月卒）、藤山、渡部奨典（第3回、1954年3月卒）、二宮（第4回、1955年3月卒）、星川順一（第5回、1956年3月卒）、百合本、高木英和（第6回、1957年3月

---

15) 『つくし』創刊号、1968年3月。

卒)、宮島(第7回,1958年3月卒)、一宮、井原(第8回,1959年3月卒)、森原、得居、中村、篠崎正男(第9回,1960年3月卒)、藤木(第10回,1961年3月卒)、宮崎、岡村、片山(第11回,1962年3月卒)、三村(第12回,1964年3月卒)、山口卓志(第14回,1965年3月卒)、岡田、高須賀、中臣(第15回,1966年3月卒)、一柿卓爾、郷原、篠田、檜垣、西岡、小西陽一(第16回,1967年3月卒)らが一文を寄せた。

また、本年3月に卒業する2部生の戸田、木村、大成平八郎、高田、伊藤紘一、大原、1部生の渡部、宮武、横田、犬飼、片山、清水、岡部、石村、長楽和代がゼミのことや学生生活のことについて書いている。

そして、巻末につくし会会則が掲げられ、また、つくし会会員名簿として、第2回(1953年3月卒)から第17回(1968年3月卒)まで、勤務先と住所が記されている。なお、この時の入江先生の住所は松山市東長戸町603の29であった。

3月下旬、第17回卒業式が行われ、経済学部299名が卒業した。卒業の式辞で、増岡学長は諸君の門出を祝し、校訓三実主義の実践を望むと述べた<sup>16)</sup>。入江ゼミでは、吾郷、伊藤紘一(学生新聞部)、大成平八郎(ゼミ連)、小原、高田、戸田、原田、東、大原ら22名が卒業した。

3月、1号館建設のために、本館(大正13年4月竣工)の一部を取り壊した。

## 18) 1968(昭和43)年度

入江先生赴任18年目である。44歳から45歳にかけての時期である。学校法人の評議員を続けている。

学長は増岡喜義が続いている(5年目)。経済学部長は伊藤恒夫が続けた<sup>1)</sup>。

4月11日、体育館において、入学式が行なわれ、経済学部367名、経営学

16) 『松山商大新聞』第152号、1968年3月19日。

1) 『六十年史(資料編)』125~131頁。

部382名が入学した。増岡学長は式辞で、学業を放棄し留年する学生が増える一方、ヘルメットをかぶり、角材をふるって政治運動に専念する学生も出てきている。形だけの学生ではなく、本当の意味の学生になっていただきたい、と述べた<sup>2)</sup>

本年度、経済学部は新しい教員を採用した。比嘉清松が西洋経済史担当の助教授として、神戸大学大学院博士課程2年目の山口卓志(本学卒業、入江ゼミ)が助手として採用された<sup>3)</sup>

本年度の入江先生の授業科目は、前年と同様で、一般教育科目の経済学、教養演習、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学であった。

一般教育科目の経済学は2クラスで入江先生と岩田裕講師が担当した。入江先生の「経済学」の教授要目は「我々の眼前には生活の様々な側面に関する歴史の流れがあり、相ついで現われる諸要求と諸政策の波浪があり、それ等全般に関する様々な理論の横行がある。そのなかで、生活の諸問題の歴史性・階級性をとらえ、それらの社会的性格を解明し、それ等に関する諸法則を見出していくことが、社会科学としての経済学の課題として、重要性をますます強めている。この観点から、経済の諸問題を法則的にとらえる訓練をしていきたい。経済構造論、経済変動論が主要な授業内容となる予定である」であった。具体的内容は、前年度とほぼ同様であったと思われる。なお、参考文献も、前年度とほぼ同様であった<sup>4)</sup>

教養演習は「唯物史観の研究」で、テキストはA・スミスの『国富論』を使い、経済の考え方を教えている<sup>5)</sup>

専門教育科目の経済学史の教授要目も、前年とほぼ同様で、古典派の生成・発展・解体過程を主として取り扱っている。参考文献も前年とほぼ同様であった<sup>6)</sup>

---

2) 『松山商大新聞』第153号、1968年5月10日。『六十年史(資料編)』173頁。

3) 『松山商大新聞』第153号、1968年5月10日。

4) 『1968年教授要目』。

5) 同。

本年のゼミ1には、大西、河相亘、菊地、佐藤、白石、高石、竹田、横田、吉村、若原、渡辺、山本ら34名が入った。1966年4月入学の新入生が大変なマスプロであったので、本年のゼミは大変なマスプロゼミとなった。

ゼミ1のテキストはサミュエルソンの『経済学（訳）上・下』、ヒルファァーディングの『金融資本論』、レーニンの『帝国主義論』で、2年間で読む計画であった。

ゼミ2（長楽和代らの学年）のテキストは、レーニンの『帝国主義論』、ヒルファァーディング『金融資本論』の輪読であった<sup>6)</sup>。

入江先生は、ゼミ連の顧問を続けている。

5月24日より3日間、第14回西日本学生経済ゼミナール大会が本学で開かれた。本学での開催は第1回以来13年ぶりであった。21大学848名の学生が参加した。24日、神戸大学の則武保夫教授の「世界経済における日本資本主義の現段階」、本学の太田明二教授の「曲がり角の経済学」の講演がなされ、2日目から部門別討議がなされた。部門別の本学の参加ゼミは次の通りである<sup>8)</sup>。近代経済学（太田ゼミ）、マルクス経済学（入江ゼミ）、日本経済論（安井ゼミ）、景気循環（小松ゼミ）、国際経済（大鳥居ゼミ）、経営学総論（高沢ゼミ）、経済政策論（望月ゼミ）、社会政策論（望月ゼミ）、金融論（稲生ゼミ）、交通論（宮崎ゼミ）、ジュニア経済（経済研究会）、社会主義経済論（岩田ゼミ）、経営管理論（元木ゼミ）、労務管理論（岩国ゼミ）、財務会計論（神森ゼミ）、ジュニア会計（菊地ゼミ）、管理会計（山下ゼミ）、貿易論（林ゼミ）。このように、入江ゼミはマルクス経済学部門に参加した。

なお、本年度も第15回全日ゼミ（インゼミ）、第8回中四国ゼミ、第5回学内ゼミが開催されたが、その状況は不明である。

10月9日から3泊4日の日程で、入江先生はゼミ2生8名と山陰地方（出

---

6) 『1968年教授要目』。

7) 同。

8) 『松山商大新聞』第155号、1968年6月30日。

雲大社、松江、美保ヶ関、皆生温泉、三朝温泉、鳥取砂丘)を旅行している<sup>9)</sup>

11月、増岡喜義学長は健康上の理由により、任期を1年残して、1968年12月31日をもって、辞任することを決めた。

そのため、松山商科大学学長選考規程にもとづき、学長候補の推薦委員会委員が選出され、その推薦委員会では経営学部八木亀太郎教授(60歳)一人を推薦し、12月6日に信任投票が行なわれ、3分の2以上の信任の結果、同教授が新学長に選出された<sup>10)</sup>

八木亀太郎教授の経歴は次の通りである。

1908年10月愛媛県生まれ。北予中学、松山高等学校を卒業し、1929年4月、東京帝国大学文学部言語学科に入学し、1932年3月卒業。同年5月東京帝大文学部副手に採用され、法政大学、東京外語大学講師、満鉄東亜経済調査局勤務等を歴任し、1947年5月東海大学予科教授に就任し、1948年12月予科長を務めていた。1949年3月同大学を退職し、同年4月松山商科大学教授に就任した。言語学者で、ペルシャ語研究の第一人者で、講義では文学、ドイツ語を教えた。校務では学生課長・学生部長を務め、法人理事も務めていた<sup>11)</sup>

1969(昭和44)年1月1日、八木亀太郎教授が第4代松山商科大学学長に就任した。また学校法人松山商科大学理事長を兼務した。

八木亀太郎新学長は就任の挨拶において、伊藤秀夫初代学長時代を「創業の時代」、第2、3代の星野通・増岡喜義学長時代を「拡張発展の時代」と位置づけ、自分の時代を「守成の時代」とし、「私学の精神」「私学の本領に徹し」我が学園を共同、連帯の精神で守り発展させていくと表明した<sup>12)</sup>

八木学長は就任の当初から創立50周年(1973年)を目指して種々の事業を計画し、その中で、新学部増設と大学院設置もその重要な柱となっていた<sup>13)</sup>

9) 『つくし』第2号、1969年3月10日、20頁。

10) 『松山商大新聞』第159号、1969年1月21日。

11) 八木亀太郎教授記念号『松山商大論集』第25巻第6号、1975年2月より。

12) 『学園報』第4号、1969年2月1日。

13) 稲生晴「大学院設置の思い出」『六十年史(写真編)』233頁。

その後、人文学部を開設し、50周年記念館もつくり、星野・増岡時代に劣らぬ「拡張発展」をなし遂げた。だから、たんに「守成」ではなく、教職員や学生、卒業生の共同の力の下、松山商大をさらに発展拡大させていった学長であったといえよう。

さて、八木学長が就任した1969年は前年からの学生運動、紛争がクライマックスに達した年である。1月18日には、東大安田講堂を占拠していた学生を強制排除する攻防戦があり、東大入試も中止された。京大でも全共闘が学生部を封鎖し、以後全学紛争に拡大している。

そのような騒然たる時代、1月18日、入江先生は四国学院で開かれた「堀研究会」で久しぶりに「A・スミスにおける国家」について報告している。その報告は「スミスの国家論の視点が何かを明らかにし、スミスの体系が国家にどのような位置を与えているか、第五編は国富論においてどういう位置を占めるか、安価な政府論の本質は何かを明らかにする目的でおこなわれた報告。スミスの市民政府に関する超歴史的・超階級的認識、国家機能論が主にとりあげられた」ものであった<sup>14)</sup>

2月16日、1969年度の入試が行なわれた。経済学部の募集人員は前年度と同じく350名で（文部省定員は250名）、志願者は1,505名であった。合格発表は2月24日になされ、857名を発表した<sup>15)</sup>

2月、伊藤恒夫経済学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、太田明二教授（59歳）が選任された<sup>16)</sup>

この春、入江先生は、皿ヶ峰へのハイキングならびにゼミ1、2部の合同合宿をしている<sup>17)</sup>

---

14) 入江奨「大学院経済学研究科申請書類」の研究概要。1971年11月10日。また、堀経夫博士喜寿記念事業委員会『経済学の研究と教育の五十年』世界保健通信社、1973年、768頁。

15) 松山商科大学『昭和44年入試要項』、『六十年史（資料編）』173頁。

16) 太田明二の経歴は、太田明二博士記念号『松山商大論集』第28巻第4号、1977年10月参照。

3月10日に、同窓会機関誌『つくし』第2号が発刊された。入江先生が「随想」を寄せている。その大要は、「“つくし”は、OBおよびOB予定者全員のもので、ぼくのものでなく、1日も早く全メンバーに我が子として待遇していただきたい」と述べ、入江先生が今特に関心を抱いている資本論第1部第7編第24章第7節の文章を引用し、「労働の社会化」「生産の社会化」の意味を確実につかみたいと記している。そして、第2号には、西日本ゼミに参加したゼミ生たちの反省会の記事「国家独占資本主義論の集約について」やOBの松沢宏、星川順一、宮島、三津山、沢田、萬井らの投稿、3月に卒業するゼミ2生やゼミ1生が一文を寄せている<sup>18)</sup>

3月22日、八木亀太郎新学長下、第18回卒業式が挙行され、経済学部277名が卒業した<sup>19)</sup>

入江ゼミでは、石村、犬飼、岩崎、片山、竹川猛、菊池、長楽和代、宮武、清水、横田、渡部ら24名が卒業した。

### 19) 1969 (昭和44) 年度

入江先生赴任19年目である。45歳から46歳にかけての時期である。学校法人の評議員を続けている。

学長は八木亀太郎である(1年目)。経済学部長は太田明二が就任した(1969年4月1日～1973年3月31日)。

八木新学長体制下、全学の校務体制に大きな変更があった。八木学長は4月、新しく教務委員会と学生委員会を設置した。教務委員会は各学部の一般教育、外国語、保健体育、関連専門教育等、共通教育関連事項に関する業務を行ない、学生委員会は学長を補佐して、厚生、補導その他全学的学生関連事項に関する

---

17) 栗原(旧姓河相)亘(1970年3月卒)「先生の暖かさと温もり」『つくし』第29号、2006年1月、24頁。

18) 『つくし』第2号、1969年3月10日。

19) 『六十年史(資料編)』141頁。

業務を行なうこととした。また、各学部<sup>1)</sup>に教務委員をおく教務委員規程を設けた<sup>2)</sup>

全学の校務名変更に伴い、初代教務委員長には体育の田辺義治<sup>3)</sup>（1969年5月1日～1971年4月30日）、初代学生委員長には伊藤恒夫が就任した<sup>2)</sup>

また、新しく設置された教務委員会委員には、経済学部では入江奨、望月清人が選ばれ、太田明二経済学部長を補佐した<sup>3)</sup>

4月9日、入学式が挙行され、経済学部553名が入学した<sup>4)</sup>

さて、本年度も新しい教員が採用され、経済学部では大阪大学助手の岩橋勝が日本経済史担当の講師として、また、飛驒知法が英語担当の助手として採用された<sup>5)</sup>

本年度からカリキュラムの改正がなされ、入江先生の授業科目は、それまでの全学向けの一般教育科目の経済学ではなく（一般教育の経済学は増岡喜義が担当）、経済学部の基礎教育科目の経済学にかわった。経済学部の基礎教育科目はA、Bの2クラスが設けられ、Aは近代経済学で増岡喜義が担当し、Bはマルクス経済学（4単位）で入江先生が担当するようになった。

従って、本年度の入江先生の担当科目は基礎教育科目のマルクス経済学、教養演習、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、そして短大の経済学Iであった。

基礎教育科目の「マルクス経済学」の教授要目は「マルクス経済学の生成史および発展史についての簡単な叙述と社会科学としての経済学の説明」で、具体的には次の通りであった。

#### 「1. マルクス主義の骨格についての簡単な叙述と社会科学としての経済学の課題の説明

---

1) 『五十年史』344～346頁。『学園報』8号、1970年2月1日。

2) 『六十年史（資料編）』126～131頁。

3) 『五十年史』344～346頁。

4) 『松山商大新聞』第161号、1969年4月30日。『六十年史（資料編）』173頁。

5) 『松山商大新聞』第161号、1969年4月30日。



## 2. マルクス経済学における研究方法

- 1) マルクス経済学における諸法則の内的関連の構造と論理  
とくに矛盾と統一と発展の論理であることに重点をおく。
- 2) 市民社会の経済構造と経済法則のとらえ方－商品分析と価値法則  
市民社会の歴史性と形成史に関する見方に注意し、価値法則論の  
なかに発展因論が内包されていることに注意する。
- 3) 資本制生産の基本法則－剰余価値生産の法則  
価値法則という基礎に立脚して生起する資本の二重構造－労働過程  
と価値増殖過程－という見解に注意を向け、資本制生産における  
再生産の基本構造についての考え方を示す。
- 4) 資本制生産の総過程－とくに平均利潤の法則と金融寡頭制支配形  
成の基礎構造について  
資本制生産の基本的法則が市民社会の経済構造という形態で現象  
化する動向をどのように法則的に解明していくかを示すことに力点  
をおき、帝国主義および国家独占資本主義の問題に接近していく諸  
論点に触れる」<sup>6)</sup>

このマルクス経済学の教授要目はほぼ前年度までの講義内容と変わらなかったと思われる。なお、テキストは入江先生の自製であり、また、参考書も前年度とほぼ同様であった。

教養演習は前年と同様「唯物史観の研究」でスミスの「国富論」を使用している<sup>7)</sup>

専門教育科目の経済学史も前年とほぼ同様で、古典学派の生成と解体過程が中心であり、参考文献も前年度とほぼ同様であった<sup>8)</sup>

6) 『1969年教授要目』。

7) 同。

8) 同。

本年のゼミ1には、井口、大北、高須（経済研究部）、高橋、東、藤井、松本和夫（学友会委員長）、光長あや子、光藤らが入った。そしてゼミ1のテキストは、サミュエルソンの『経済学』とマルクスの『資本論』、レーニンの『帝国主義論』であった。ゼミ生の光長あや子もサミュエルソンの経済学とマルクスの資本論を学び、卒論のテーマは国防支出と経済発展だったと回想している<sup>9)</sup>。

ゼミ2（横田らの学年）のテキストは、サミュエルソンの『経済学』とヒルファーディングの『金融資本論』であった。

また、本年度も週1回のゼミのほかに週1回のサブゼミを持った。そして、第15回西日本ゼミ（6月）、第9回中四ゼミ（11月）、第16回全日ゼミ（インゼミ）、第6回学内ゼミも開かれており、入江ゼミはこれらの大会に向けて準備、発表した。

また、入江先生は引き続きゼミ連顧問を続けている。

6月5日から9日まで、第15回西日本ゼミ大会が関西大学において開催された。本学からは経済研究部、入江ゼミ、伊達ゼミ、岩国ゼミが参加した<sup>10)</sup>。

8月、入江先生は経済学教育研究会編『古典・マルクス・近代 43の経済学』（朝日出版社）の経済学史の著作の中で、「T.マン：スチュアート等と重商主義者」「A.スミス」「D.リカドウ」の3論文を執筆している。この論文の概要について、入江先生は後に次のように述べている。

「短いスペースだから論証は不能だが、資本の論理の登場問題に視点において三編を扱っている。更にスミスについては交換法則論と資本蓄積論との関連を指摘し、リカドウについては、その価値論の価値函数的性格を指摘し、それがリカドウ理論の性格に重要な影響を及ぼしているとい

---

9) 『1969年教授要目』。村上あや子「松山と商大と私」『つくし』第27号、2003年10月、5頁。

10) 『松山商大新聞』第163号、1969年7月12日。

う見解を提起している」<sup>11)</sup>

8月31日、学生待望の学生会館（加藤会館の西隣。喫茶、理髪室、会議室、事務室、部室）が竣工し、また、図書館、研究センターの研究室の増築がなされた<sup>12)</sup>

9月1日、新本館（1号館）が竣工した。場所は1924年（大正13）の本館の南側の建物を壊し、その跡地で、地下1階、地上5階、コンクリート建エレベータつきであった。1階に事務局長室、総務、経理課が入り、2階に学長室、両学部長室、理事室。3階～5階はゼミ教室と会議室が置かれた。そして、この日に竣工式が行なわれた<sup>13)</sup>

10月、入江先生は『松山商大論集』第20巻第4号に「スミス国家論覚書－国家と国富－」を掲載した。この論文の概要について、入江先生は後に次のように述べている。

「スミスの国富論の理論構造の特質が、国家を経済外要因として位置づけ経済の内部的な運動法則を構造を視点において、究明した理論体系である点にあるとみなす解釈は、正しいスミス解釈であるだろうか。これがこの論文の問題意識である。統治の自然史的考察におけるスミスの視点は超歴史的な市民社会、市民政府の一般的原理の究明におかれているという見解、自然的自由の体系は、従前の政治経済学の諸体系と対比してスミスが積極的に提起した新しい政治経済学の体系・政策体系であって、政治経済学批判の体系でもなく、抽象的経済理論のモデル的体系でもないという見解、スミスが積極的に提起する自然的自由の体系には、国家の役割を重視し主権者の富を重視する見解が内包されているという見解、国家と経済と

11) 入江奨「大学院経済学研究科申請書類」の研究概要。1971年11月10日。

12) 『松山大学九十年の略史』46頁。

13) 『五十年史』347頁。なお、この1号館は2017～18年に撤去された。

の関連をどのように考えるべきかという視点そのものをスミスはもっていなかったという見解、自然的自由の体系は人民のみの自律的体系ではなく、主権者と人民相互の結びつき方の体系であり、国家はその体系の内部にしっかりと、ただし一定の作用すべき領域をもって位置づけらるべきものとみられているという見解が提示されている<sup>14)</sup>

10月21日、国際反戦デーで、「商大学生同盟」「愛媛大学全共闘」の学生20数名が出来たばかりの本学新本館のゼミ教室、会議室等をバリケード封鎖するという大事件が起きたが、その後、説得により13時間後解除されている<sup>15)</sup>

11月1日～3日、第9回中四ゼミ大会が下関市立大学にて開催された<sup>16)</sup> 参加状況の詳細は不明である。

1970（昭和45）年2月1日、入江先生は『学園報』第8号（1970年2月1日）に「語学教育の在り方」の寄稿を要請され、一文を載せ、外国語について「未知の結合に達する武器として外国語を考えている<sup>17)</sup>」という味わい深いものであった。

2月15日、1970（昭和45）年度の入試が行なわれた。経済学部募集定員は350名で（文部省定員は250名）、志願者は2,143名であった。2月23日に合格発表を行ない、777名を発表した<sup>18)</sup>

この春、入江先生は卒業生と南紀方面に卒業旅行をしている<sup>19)</sup>

3月21日、第19回卒業式が挙行され、経済学部434名が卒業した<sup>20)</sup> この時、卒業した一人に芳野俊郎（岩田ゼミ、社会科学研究部、後、1973年4月

---

14) 入江奨「大学院経済学研究科申請書類」の研究概要。1971年11月10日。

15) 『五十年史』348頁。

16) 『松山商大新聞』第163号、1969年7月12日。

17) 入江奨「語学教育の在り方」『学園報』第8号、1970年2月1日。

18) 松山商科大学『昭和45年度募集要項』、『六十年史（資料編）』174頁。

19) 栗原（旧姓河相）亘（1970年3月卒）「先生の暖かさと温もり」『つくし』第29号、2006年1月、24頁。

20) 『六十年史（資料編）』141頁。

修士課程入学) がいる。

入江ゼミでは、大西、河相、菊地、佐藤、白石、高石、竹田、横田、吉村、若原、渡辺、山本ら34名が卒業した。

入江ゼミでは、今回の卒業生による寄附金1万6,000円を基金として文庫「つくし文庫」を設け、これを機会にゼミ生およびゼミ出身者の縦の組織化に乗り出した。名称は「つくし会」、そして、第1部生により続けられていた個別テーマによる研究発表を編集した論文集「つくし会誌」を発刊することとした<sup>21)</sup>

## 20) 1970 (昭和45) 年度

入江先生赴任20年目である。46歳から47歳にかけての時期である。学校法人の評議員を続けている。太田明二経済学部長の下で教務委員を続けている。

学長は八木亀太郎である(2年目)。経済学部長は太田明二が引き続き務めた<sup>2)</sup>

4月8日午前10時、体育館において、入学式が挙行された。経済学部は397名が入学した<sup>2)</sup> 八木学長は式辞で師弟相互の対話、交流を呼びかけた<sup>3)</sup>

本年度も新教員が採用された。経済学部では白井孝昌が経済原論、計量経済学担当の助教授として(安井修二の後任)、五島昌明が体育の講師として、神戸大学大学院博士課程在学中の青野勝広(本学卒業、望月ゼミ)が助手として採用された<sup>4)</sup>

八木亀太郎学長ら大学当局は本年度の1年生から初めての試みとして、「一般演習」を必修科目に加えることにし、全学の教員が担当することとした。それは、前年の封鎖事件もその背景にあるだろう<sup>5)</sup>

---

21) 『松山商大新聞』特別号, 1970年3月21日。

1) 『六十年史(資料編)』126~131頁。

2) 『松山商大新聞』166号, 1970年6月1日。『六十年史(資料編)』174頁。

3) 『学園報』第10号, 1970年5月1日。

4) 『松山商大新聞』166号, 1970年6月1日。

5) 『五十年史』350~351頁。

本年度の入江先生の担当科目は、基礎教育科目の経済学B「マルクス経済学」（4単位）、一般演習（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、そして短大の経済学I（2単位）であった。

マルクス経済学の教授要目は次のごとくであった。

- 「1. マルクス主義体系の説明，社会科学における経済学の位置についての説明
2. マルクス主義体系の学史的説明
3. マルクス経済学における研究方法
4. 価値法則－価格体系，物価問題についての考え方，国民所得論との関係，計画経済問題
5. 資本制生産社会の基本的経済法則とその作用の仕方－生産，利潤と賃金，資本蓄積，流通，競争，資本の集中，地代，国際経済，恐慌
6. 国家財政・金融・経済・社会政策と独占資本主義・帝国主義」

そして、教科書は自製の『経済学講義』（プリント）を使用した。また、参考書は金子ハルオ『経済学（上）』新日本出版社、林直道『経済学入門』汐文社、マルクス『資本論』河出書房、レーニン『帝国主義論』大月書店、マルクス『経済学・哲学論集』河出書房、であった<sup>6)</sup>

一般演習は、前年と同様、アダム・スミスの『国富論』をテキストとした<sup>7)</sup>。経済学史の教授要目は次の如くであった。

- 「1. 重商主義期（狭義の重商主義期）
2. 自由主義経済論の抬頭期
3. 重農学派期

---

6) 『1970年教授要目』。

7) 同。

4. 古典学派の形成期
5. 古典学派の発展期
6. 古典学派の解体期
7. 近代経済学の階級的分化期」

そして、教科書は自製の『経済学史講義』（プリント）で、参考書は、マルクス『剰余価値学説史』大月書店、シュンペーター『経済分析の歴史』岩波書店、白杉庄一郎『経済学史概説』ミネルヴァ書房、経済学教育研究会編『古典、マルクス、近代43の経済学』朝日出版社、堀経夫編『経済思想史辞典』創元社、であった<sup>8)</sup>

本年のゼミ1には、桐山、八木、安岡（ゼミ連）ら15名が入った。ゼミ1のテキストはケインズの『一般理論』（おそらく原書）であった。

ゼミ2（光長あや子らの学年）のテキストはサミュエルソンの『経済学下』、ハロッドの『景気循環論』であった<sup>9)</sup>

本年も、第16回西日本ゼミ（北九州大）、中四ゼミ（10月31日～11月2日、本学で開催）、第17回全日ゼミ（インゼミ）が開催され、入江ゼミはこれらに取り組んだ（学内ゼミは中四ゼミが本学で開催されるのでこの年は中止）。

また、入江先生は引き続きゼミ連顧問を続けている。

本年度も八木亀太郎学長ら大学側は船上大学（第2回）を企画し、4月14日に経済学部、翌15日に経営学部が開催し、新入生と交流を深めた<sup>10)</sup>

10月31日～11月2日にかけて、ゼミ連が主催して、第10回中四国政経ゼミナール大会が本学において開催された。10月31日は記念講演会で、宮崎義一（横浜国大教授）が「現代のビッグ・ビジネス－資本主義の問題点－」について講演した。11月1日は一般討論「現代資本主義と公害」で山口卓志（経

---

8) 同。

9) 同。

10) 『松山商大新聞』第165号、1970年5月1日。

経済学部講師）と元木淳（経営学部教授）が講師を務めた。2日は部門別討論で、経済学部門では、原論Ⅰ「成長理論における技術進歩」太田ゼミ、原論Ⅱ「国家独占資本主義」入江ゼミ、小松ゼミ、西洋経済史「ロシア農奴制経済と工業化－先進諸国との比較－」比嘉ゼミ、財政学「公害と財政－高度成長期と財政の問題を中心として－」増岡ゼミ、山口ゼミ、日本経済史「日本における近代の経済発展の諸条件」岩橋ゼミ、社会思想史「現代日本における民主主義」伊達ゼミ、日本経済論「経済成長と公害－GNPを再考する」太田ゼミ、ジュニア経済学「ケインズ経済学の貢献と限界」太田ゼミ、経済研究部、経済地理「日本資本主義と公害」宮崎ゼミ、辻ゼミ、金融論「現代資本主義における金の役割－国家独占資本主義段階における貨幣的役割」稲生ゼミ、国際経済論「国際通貨体制におけるドルの役割と今後の課題」大鳥居ゼミ、経済政策「経済政策からみた公害問題」白井ゼミであった<sup>11)</sup>。経済学部のほとんどのゼミが発表していることがわかる。教員も学生の自主的研究活動に熱心であったことがわかる。

なお、本年度、第17回全日ゼミ（インゼミ）、第16回西日本ゼミ（北九大）も開催されているが、詳細は不明で、入江先生によると、多くのゼミが参加したとある<sup>12)</sup>。

11月、八木亀太郎理事長ら理事会は前、増岡学長時代、そして、八木学長就任時から懸案となっていた大学院設置を決断した。その決断に当たって、稲生晴理事の決断が大きい、また、経済学部長の太田明二の積極的な姿勢も大きかった<sup>13)</sup>。

12月11日、八木亀太郎理事長ら大学当局は、人件費の増額、他大学に遜色ない教育環境整備、教授陣の充実を行なうために、1971（昭和46）年度から

---

11) 『松山商大新聞』第167号、1970年9月25日、同、第168号、1970年10月31日。「中四国政治経済ゼミナール大会、原論二部 国家独占資本主義論」『つくし』第4号、1971年3月、2～9頁。

12) 入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』247～250頁。

13) 稲生晴「大学院設置の思い出」『六十年史（写真編）』233～234頁。



授業料を6万円から8万円へ、維持費を2万円から3万円へ、合計3万円の値上げを提案した。

それに対し、反発を強めた学友会は翌年1971（昭和46）年1月22日に学生大会を開き、23日から第1波ストに突入した。開校以来はじめてのストであった。当日10時からの八木学長・理事長ら大学当局との交渉には学生約1,000名が集まった。激しい応酬が続いたが、議論は平行線に終わった。25日、学友会は代議員会を開き、「今後はストをやらない、大学側との交渉は学友会総務にまかせる」という動議が出て、賛成多数で決定され、事態が収拾している<sup>14)</sup>

2月21日、1971年度の入試が行なわれた。経済学部募集人員は350名で（文部省定員は250名）、志願者は1,386名であった。合格発表は3月1日になされ、799名を発表した<sup>15)</sup>

3月下旬、第20回卒業式が挙行され、経済学部383名が卒業した<sup>16)</sup> 入江ゼミでは、井口、大北、高須（経済研究部）、高橋、東、藤井、松本和夫（学友会委員長）、光長あや子、光藤ら23名が卒業した<sup>17)</sup>

さて、大学院問題が動き始めた。稲生晴の「大学院設置の思い出」から、その大要を引用しよう。入江先生がかかわっている。

「〔1971年〕3月11日に大学院設置委員会の第1回委員会が開催された。委員は経済学部から太田明二、入江奨、望月清人、経営学部から越智俊夫、井上幸一、岩国守男、そして理事側の元木淳、神森智、稲生晴の9人が委員となり、「松山大学大学院設置要項」を理事会側が示し、意見を出し合った。そして、委員長に稲生晴を、原案作成の専門委員に入江、井上、稲生

14) 『五十年史』351～352頁。

15) 松山商科大学『昭和46年度募集要項』、『六十年史（資料編）』174頁、294頁。

16) 『六十年史（資料編）』141頁。

17) 光長あや子が、「46年度卒業生プロフィール プライバシーごめんあそばせ」を『つくし』第4号、1971年3月に、ゼミ生の姿をユーモアを交えて記している。

の3人を決めた。

3月13日に3人の専門委員会（原案作成委員会）を開き、具体的に検討し、大学院の組織、開設科目、教員組織の面で設置基準、審査規準との関連でいくつかの疑問点が絞り出され、委員長の稲生晴が16日～18日上京し、文部省、大学院設置大学、設置専門委員に当たって確かめることにした。大体のことはわかったが、なお具体的な青写真が不明であった。東京で途方にくれていたが、切羽詰まって頭に浮かんだのが、上京前の入江教授と小松情報であった。立教大学の小林昇先生（経済学史の泰斗、専門審査委員）のお宅を電話帳で調べ、半分諦めの気持ちで、電話して、入江教授の紹介だと述べ面会をお願いした。その結果、霧が晴れて目的地への最短距離の良道を見出した<sup>18)</sup>と。

小林昇先生はその後、本学の大学院の設置に当たり、理論面実務面でご指導された。この小林先生を紹介したのが入江先生であり、稲生先生は入江先生に深く感謝している。

## 21) 1971（昭和46）年度

入江先生赴任21年目である。47歳から48歳にかけての時期である。学校法人の評議員を続けている。太田明二経済学部長の下で教務委員を続けている。また、本年度から図書館長に就任した（1971年4月8日～1973年3月31日）。

学長は八木亀太郎（3年目）である。経済学部長は太田明二が引き続き務めた<sup>1)</sup>。

4月上旬、午前10時、体育館において、入学式が挙行され、経済学部460名が入学した<sup>2)</sup>。

---

18) 稲生晴「大学院設置の思い出」『六十年史（写真編）』234～235頁。

1) 『六十年史（資料編）』126～131頁。

2) 同、174頁。

八木学長は式辞で、私学としての本学の特質を述べつつ、学問と人間との和解、学問研究の大切さを呼びかけた<sup>3)</sup>

本年度も新しい教員が採用された。経済学部では、森田邦夫が商法手形小切手担当の助手として、岡本詔治が民法物権担当の助手として採用された。

本年度の入江先生の担当科目は、前年と同様、基礎教育科目のマルクス経済学（4単位）、一般演習（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、そして短大の経済学I（2単位）であった。

マルクス経済学の教授要目は前年とほぼ同様で、入江奨「経済学講義」（プリント）を使用している。

経済学史も前年度とほぼ同様で、入江奨「経済学史講義」（プリント）を使用している<sup>4)</sup>

本年のゼミ1には、伊藤、久保、重岡、松浦由紀子（ゼミ連）、森、山積、重信、得居らが入った。

ゼミ1のテキストはマーシャルの『経済学原理』（おそらく原書）を読み、そして、サブゼミとして、4つの班（古典派、マル経、近経、戦後日本の発展過程研究班）にわけ、グループ別に個別指導をはじめている。

ゼミ2のテキストはケインズの『一般理論』（原書）の残りの部分を読み、4グループに分けて指導している<sup>5)</sup>

また、入江先生は引き続き、ゼミ連顧問を続けている。

また、校務では図書館長に就任し、図書館の充実に務めた。さらに太田経済学部長の下、教務委員を続け、さらにまた大学院設置の専門委員（稲生晴、入江奨、井上幸一）として申請書類の作成業務に従事するなど多忙であったと推測される。

本年度、第11回中四ゼミ、第18回全日ゼミは開かれたが、第17回西日本

---

3) 『学園報』第14号、1971年6月1日。

4) 『1971年教授要目』。

5) 同。

ゼミは主催予定校の関大が学内事情のため辞退され、以降開催されなくなった<sup>6)</sup> 1955年第1回が本学が主唱して開始したのに残念なことである。

10月12日、学内大学院設置審議会は第7回目の会合を開き、大学院経済学研究科修士課程の認可申請原案を決定し、14日に教授会で承認をうけ、21日の理事会および評議員会で決定された。

大学院設置の意義と目的は次の通りであった。(一) 本学の学部課程を基礎にして、より深く広い専門的教育研究課程を設けることによって最終的教育機関としての本学の発展をはかる。(二) 本学学生にたいして、大学院の門戸を拡大し、学生の学問研究の意欲と条件を改善し、教育研究の水準を高める。(三) 教員の研究条件を高め、優秀な教員を招くとともに、本学において研究者を養成することができる。(四) 学部志願者の面に好影響をもたらす。(五) 大学院生の存在が本学の教育研究の体制に活発な作用を与える。(六) 都市に集中する大学院にたいして本学は四国で唯一の経済系大学院として地域における教育文化の中心的存在となり、地域の政治、経済、文化、自治に寄与することができる、ことがあげられた<sup>7)</sup>

大学院設置の理由はまことに格調高いもので、設置に中心的に関与した入江先生らの熱意が窺われる文章といえよう。

そして、11月29日に、八木亀太郎理事長は『松山商科大学大学院設置認可申請書』を文部省に提出した。その大要は、経済学研究科経済学専攻修士課程を新設する、修業年限は2年、入学定員は10名であった。入江先生は経済学史特講、同演習の担当者として申請された<sup>8)</sup>

1971年12月末で、八木亀太郎学長の3年の任期が満了するので、推薦委員会で八木亀太郎教授1人が推薦され、投票の結果、八木教授が再選された。

1972(昭和47)年1月1日、八木亀太郎学長・理事長が再任され、2期目

6) 入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史(写真編)』247～250頁。

7) 稲生晴「大学院設置申請の原案決定」『温山会報』第14号、1971年11月。『五十年史』354～355頁。

8) 文部省への『松山商科大学大学院設置認可申請書』より。

がスタートした。

1972（昭和47）年1月1日の『学園報』第17号に、入江先生は図書館長として「図書館を学園のセンターに」と題する一文を載せ、図書館に必要な陣容と施設と財源を整備する必要がある、私学に対する人件費補助をするに当たって図書館の司書を教員なみに扱う必要がある、文献調達費は3,300万円で同規模の大学の中では第1級であるが、この予算を有効に利用するために諸研究分野の要求を均分にする、学生の要求にできるだけ答える、出来るだけ多く集めるために複本は出来るだけ避けることなどを述べている<sup>9)</sup>

2月20日、1972（昭和47）年度の入試が行なわれた。経済学部の募集人員は前年と同様350名（文部省定員は250名）であった。経済学部の志願者は1,568名であった。合格発表は2月28日になされ、経済学部は799名を発表した<sup>10)</sup>

3月下旬、第21回卒業式が挙行された。経済学部349名が卒業した<sup>11)</sup> 入江ゼミでは桐山、八木、安岡正（ゼミ連）ら15名が卒業した。

3月30日、文部省より大学院経済学研究科修士課程の設置認可がおりた<sup>12)</sup>

## 22) 1972（昭和47）年度

入江先生赴任22年目である。48歳から49歳にかけての時期である。学校法人の評議員を続けている。太田明二経済学部長の下で教務委員を続けている。また、図書館長を続けている。

学長は八木亀太郎である（4年目）。経済学部長は太田明二が引き続き務めた<sup>1)</sup>

4月上旬、午前10時より体育館において、入学式が挙行された。経済学部

---

9) 『学園報』第17号、1972年1月1日。

10) 松山商科大学『昭和47年度募集要項』、『六十年史（資料編）』174頁。294頁。

11) 『六十年史（資料編）』141頁。

12) 『大学院申請書類』より。

1) 『六十年史（資料編）』126～131頁。

446名が入学した。

本年度の特筆すべきことは、4月1日、「松山商科大学大学院経済学研究科」（修士課程）が開設されたことである。初代研究科長には太田明二教授が就任した（1972年4月1日～1974年3月31日）。経済学部長との兼務であった。

そして、大学院経済学研究科の設置要員として、経済学部では名誉教授の上田藤十郎（日本経済史特講，同演習），元高知大学教授の国沢信（計量経済学特講，同演習），元神奈川大学教授渡植彦太郎（経済政策特講，同演習）が大学院教授兼経済学部教授として採用された<sup>2)</sup>

そして、4月23日、第1回大学院入学試験が行なわれた。定員10名に対し、受験者は6名で、4名が合格した。

5月8日、大学院の第1回入学式が挙行され4名が入学した。この時の入学者は赤松南海男（福岡大学卒），粕谷進（1972年3月松山商大経済学部卒，太田ゼミ，経済研究部），中野和幸（同，望月ゼミ），森貞俊二（1967年3月松山商大経営学部卒，神森ゼミ）であった。赤松は日本経済史の上田演習，粕谷は理論経済学の太田演習，中野は比較流通経済学の井上演習，森貞は経済学史の入江演習生となった<sup>3)</sup>

さて、本年度の学部の方にもどろう。

本年4月1日、八木亀太郎学長・理事長は創立50周年記念事業の一環として、新学部を設置すべく、設置委員会を設けた（委員長は稲生晴理事）。

本年度の入江先生の担当科目は、前年と同様に、基礎教育科目の経済学Bマルクス経済学（4単位），一般演習（2単位），経済学史（4単位），ゼミ1，2（各4単位），そして短大の経済学I（2単位）であった。そして大学院は経済学史特講と演習となり，修士1年の森貞俊二を指導した。

マルクス経済学の講義内容は前年度とほぼ同様で，フリーノート方式であった。参考書も前年とほぼ同様であった。

---

2) 『大学院申請書類』より。

3) 『学園報』第20号，1972年7月1日。『六十年史（資料編）』68頁。

また、経済学史の講義も前年度とほぼ同様で、フリーノート方式であった。参考書は前年とほぼ同様であった<sup>4)</sup>

本年のゼミ1に、浅沼、大野、加地四郎（ゼミ連委員長）、杉脇、能田、西岡らが入った。ゼミ1のテキストはマーシャルの『経済学原理』（おそらく原書）を読み、また、サブゼミとして、前年度と同様に4班に分けて個別指導をおこなっている。

ゼミ2のテキストも前年からのマーシャルの『経済学原理』の継続であった（おそらく原書）<sup>5)</sup>

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

4月、入江先生は、経済学史学会西南部会編『近代経済学史研究』（ミネルヴァ書房）の第1章「近代経済学の成立」の第1節「限界効用学説」を執筆した。この論文は「限界効用」学説のジェボンズとメンガーを取りあげ、その論理的基礎、論理構造を解明したものであった。入江先生は後にこの論文について、「古典派との関連を連続性に特に注目しながら検討し、古典派解体の後にマルクス学派との対応関係を客観的にもち乍ら登場した限界効用学説の歴史的 성격と特徴にメスを加えている。ジェボンズ、メンガーについて主に論じている」と述べている<sup>6)</sup>

本年度も、ゼミ連の努力により第12回中四ゼミ、第19回全日ゼミ、第8回学内ゼミも開催されたが、その記事は『松山商大新聞』にはなく、不明である。

11月11日～13日の3日間、第36回経済学史学会全国大会が本学において開催された。約250名が参加した。入江先生が大会の世話をした。13日は砥部焼、面河溪谷を見学した<sup>7)</sup>

1973（昭和48）年2月18日、1973年度の入試が行なわれた。経済学部の新入生募集人員は350名（文部省定員は250名）で、志願者は1,583名であった。合格

4) 『1972年教授要目』。

5) 同。

6) 入江奨「松山商科大学大学院（博士課程）設置協議書」の研究概要、1973年11月28日。

7) 『五十年史』362頁。

発表は2月26日になされ、901名を発表した<sup>8)</sup>

2月、太田明二経済学部長の任期満了に伴う経済学部長選挙が行なわれ、入江奨先生が選出された。

3月、入江先生は経済学史学会西南部会編『経済学史研究』（ミネルヴァ書房）の第2編「古典派経済学の体系とその展開」の第6章「マルサス」を執筆した。この論文について、入江先生は後に「一方で概説であることを求められながら、他方で、マルサスの社会科学の形成のプロセスとその体系の特徴に照明をあて、特に、『人口論』と『経済学原理』の関連について、全体としてどのように考えたらいいかを問題にしている。マルクスが『矛盾』の確認から出発し、体制に対する平等主義的批判の空想性をつき、矛盾の法則的認識に取り組み、『自然の恩恵』にからみついているモツレをときほぐし、『自然の恩恵』を生かす道を考えた、と見ている」と述べている<sup>9)</sup>

3月下旬、第22回卒業式が挙行された。経済学部447名が卒業した<sup>10)</sup> 入江ゼミでは、伊藤、久保、重岡、松浦由紀子（ゼミ連）、森、山積、重信、得居ら34名が卒業した。

3月末、大学院経済学研究科修士課程の入試が行なわれ、定員10名に対し、11名が受験し、5名（芳野俊郎ら）が合格した<sup>11)</sup>

（以下、次号）

---

8) 松山商科大学『昭和48年度入学試験要項』、『六十年史（資料編）』174頁。294頁。

9) 入江奨「松山商科大学大学院（博士課程）設置協議書」の研究概要、1973年11月28日。

10) 『六十年史（資料編）』141頁。

11) 同、161頁。